

訪問看護ステーションポプラ

症 例 概 要 ご利用者：80代 男性 要介護5

病名：#1パーキンソン病 #2出血性脳梗塞 気管切開・人工呼吸器管理

#3リウマチ性多発筋痛症 #4甲状腺機能低下症

(経過)

2014年にパーキンソン病と診断。2020年の薬剤調整目的での入院中に褥瘡形成し、退院時から訪問看護での継続的処置のため介入開始。併せてパーキンソン病に対する訪問リハビリも開始。

2022年8月に肺炎から出血性脳梗塞を発症し、#2の状態となる。#1と併せて重介護状態となり長期療養病院で2年間療養していたが、奥様の自宅で一緒に過ごしたい思いが強く、病院や親族の反対がある中、2024年に自宅退院となり訪問看護とリハビリが再開。

内 容

パーキンソン病と褥瘡を抱え、看護とリハビリを必要としていたご利用者は、2022年の肺炎を契機に出血性脳梗塞を発症され、人工呼吸器が離脱できない要介護5の寝たきり状態となりました。病院からは在宅復帰は困難とされ、長期療養病院への転院を勧められていましたが、奥様は「自宅で一緒に暮らしたい」と強く願い、親族からの反対を受けながらも諦めることなく2年間にわたり思い訴え続けられました。連日の病院通いで介護指導を受け、人工呼吸器の管理まで習得された奥様の努力により、2024年6月に在宅療養が実現しました。

退院当初は「看取りの覚悟」が前提でしたが、その後1年3ヵ月、再入院することなく在宅生活を続けられました。状態が次第に不安定となる中でも、奥様は「残された夫婦の時間を笑顔で過ごしたい」と願い続けられました。特に「夫をもう一度自慢の庭に連れ出したい」という想いを受け、医師、ケアマネジャー、福祉用具業者、レスピレーター業者、看護師、セラピストが連携し、安全に庭へ出るための計画を重ねました。

当日はあいにくの雨でしたが、スタッフや関係者の協力により実現。庭に出られたご利用者は大きく目を開け、花や木、空や雨粒をしっかりと見つめ、奥様の笑顔を見返されました。ご夫婦が目を合わせ感動を分かち合う姿は、長年病気に立ち向かいながらも前向きに過ごされてきた歩みの象徴であり、残され

た時間を豊かにする大きな力となったと思います。

本症例は、「看取りに向けたネガティブな日々」ではなく、「残りの時間を笑顔で過ごす」という奥様の願いを法人の垣根を越えてチームで取り組み叶えた症例です。

ご利用者のご家族の想いに寄り添い、専門職が一丸となって支えたことで、かけがえのない夫婦の時間を創り出すことができました。